

一期生14名が旅立ち、新たに16名が入学しました！

平成29年3月24日、27年度入学した宇大教職大学院一期生14名に学位記が授与されました。今後は、それぞれの赴任地において宇大教職大学院で培った専門性と実践力をいかに発揮することを期待しています。また、4月には新たに16名の院生が入学しました。(文責：原田浩司)

◆教職大学院で学んだこと

「私は、教職大学院の一期生として、教育分野の研究の難しさを改めて実感し、研究の方向性に迷い、研究の意味や価値を自分自身に問い直したこともありましたが、諸先生方や院生の仲間たちとの対話を繰り返し、省察を重ねることで、課題を解決し、理論を再構築することができました。二年間の学びを終える今は、一期生だからこそ経験できた本質的な学びの楽しさ、深い知の追究があったと考えています。また、仲間との絆を深めながら、教職大学院という新しい学びの場の歴史を一步一步作り上げてきた貴重な経験に大きな喜びを感じています。」

学校現場に密着して進めてきた教育実践プロジェクトは、研究成果を学校現場に還元することで、研究機関である大学と学校現場の距離を有機的に近づける役割を果たし、シームレスな連携を実現しました。これからも、理論と実践の往還を意識して、学び続けていきたいと考えています。」(学位記授与式総代謝辞より)

平成28年度学位記授与式総代 田島 文博(現職派遣院生)



平成29年度新入生が語る

《宇大教職大学院に期待すること》

(50音順)

◇石川 綾子 (現職派遣院生)

* 先生方と仲間との出会いを大切にし、理論と実践を学びながら、自分の見識を深めていきたいと思っています。

◇井寺 聡 (現職派遣院生)

* これまでとは違う視点から教育について学ぶことをとおして、これからの教員としての在り方を考えたいです。

◇伊藤 駿 (学卒院生)

* 自分の力を高める2年間にしていきたいです。現職の先生方から多くを吸収していきたいと思っています。

◇大関 健一 (現職派遣院生)

* より広く、より深く教育について考え、教員としての自分を見つめる2年間にしていきたいです。

◇小川 雅弘 (現職派遣院生)

* 多くの学びを学校現場や生徒に持ち帰れるように大学の先生方や現職・学卒院生から吸収したいと思います。

◇小又 永理 (学卒院生)

* 教職大学院で教育に関する知識を深め、現職の先生方と共に学び合いながら大きく成長したいと思います。

◇柴田 哲朗 (現職派遣院生)

* 今まで経験してきたことを振り返り、新しく身に付けなければならないことを見つけたいと思っています。

◇高橋 真実 (学卒院生)

* 現職の先生方と共に多くのことを学び、教師としての力量を一層高めていけるよう日々精進していきます。

◇田村 光 (学卒院生)

* 大きなチャンスを大いに利用し、2年後大きく成長した自分でありたいことを期待します！

◇土山 桃佳 (学卒院生)

* 教職大学院では、常に学び続ける姿勢を持ち、実践と理論を重ねながら成長できる2年にしたいと思っています。

◇寺崎 裕史 (現職派遣院生)

* 教員としての資質能力の向上はもちろんのこと、学び合うことで日に日に新たな自分を発見していきます。

◇戸田 智之 (学卒院生)

* 現職の先生方、学卒院生の仲間たちとともに学び、学部時代より一回りも二回りも成長したいと思います。

◇永嶌 政宏 (現職派遣院生)

* 教職経験の中で作り上げてきた既存概念を良い意味で崩し、新たな価値観を築く学びの場にしたいです。

◇成田 芳子 (現職派遣院生)

* 異校種の現職生とフレッシュな学卒生と一緒に学ぶことに魅力を感じています。学びを楽しみたいです。

◇村田 有美 (現職派遣院生)

* 子どものよりよい学びのため、まずは自分自身の学ぶ姿勢から見直したいと思います。がんばります！

◇湯澤 浩之 (現職派遣院生)

* 今までの自分を振り返り、教師として少しでも向上できるように多くのことを吸収したいと思います。



「環境アセスメント」が話題になっていますが、本来は「査定」「評価」の意味です。教育分野においても発達障害児を理解する方策としてアセスメントの重要性が叫ばれています。教育的アセスメントでは、子どもの観察や、学習成績、作品、心理・発達検査、保護者からの情報（生育歴、発達経過など）など様々な客観的情報を集め、その結果を総合的に整理したり解釈したりしていく一連の過程をさしています。

アセスメントには専門的に状態像を探っていく「診断的な機能」をもつものがあります。代表的なものとしてWISC-IVや、K-ABC II、DN-CAS、田中ビネーなど心理の専門的な有資格者だけが行うものがあり、その解釈にも専門性が要求されます。医療機関や教育センター等で検査を受けるケースが増えていますが、その結果が教育に活かされていないという課題もあります。

もうひとつは、ある条件や基準にそって大まかに対象となる者を抽出する「スクリーニング的な機能」をもつものがあります。最近、発達障害の早期発見や指導・支援のために学校の先生方にも行えるアセスメントツールの開発が盛んに行われています。まずは、「読み書き計算のアセスメント」に関するもので、文章をスムーズに読めなかったり板書をうまく写せなかったり、計算に時間がかかったりする課題を客観的なデータとして評価することが可能です。例えば「多層指導モデルMIM：読みのアセスメント」「特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン」「STRAW小学生の読み書きスクリーニング検査」などがあります。また、漢字や文字の形や図形がうまく捉えられない子に対する視知覚検査「WAVES」、LD判断のための調査票「LDI-R」、コミュニケーションや社会性などの発達水準を評価する「S-M社会生活能力検査」「Vineland-II適応行動尺度」などがあります。専門機関を紹介する前に、まずは学校で気になる子を教師が観察を通して早期に発見する。次に、アセスメントツールを有効活用し課題を明確にする。その後、教育的指導・支援を実施することで困り感のある子を早く救うことが大切です。

《シリーズ:教職大学院授業紹介⑨ 「授業研究の運営と課題」(共通科目[前期])》

「授業研究の運営と課題」は、授業力向上に役立つ授業研究のあり方を探究する授業です。個人や自主的グループによる授業研究も大切ですが、学校で授業力向上のために重要な役割を果たすのが、校内授業研究会です。校内授業研究会を中核となって運営できる力を身に付けてもらうのがゴールです。

初めは、授業研究の歴史や意義、授業実践と省察との関係などについて講義があり、次に授業ビデオを用いて授業を見る視点を確認します。「教師よりも子どもを見る」というのが近年の授業研究の傾向ですが、その意味・意義や方法について深く考えられていない学校も散見されます。実際に記録を取りそれを基にして「先生が教えたかったこと」だけではなく、「子どもが実際に学び得たこと、学び得なかったこと」を確認する議論を行います。



この作業をていねいに行くと、学卒院生はもちろんですが、経験を重ねてきた現職院生にとっても「学び直し」が起こり、「これまでも子どもを見ていたつもりだったが、ま

だ教師目線になっていることが分かった」「あるべき授業について狭い思い込みに囚われていたことに気づいた」というような感想が聞かれるようになります。



中間で、校内授業研究会の持ち方について、これまでの学校での経験や各地の教育センター等が出している資料から学び合います。その上でさらに授業ビデオを見て、模擬的な校内授業研究会を実施します。

今、学校では世代交代が急速に進み、経験を伝えるベテランが減って新人が続々と入っています。授業の見方や授業技術はもちろん、その土台にある子ども観や教育観までを視野に入れた議論を行って、いかに若手を育てていくかが問われています。学卒院生と中堅の現職院生がともに学ぶ宇大の教職大学院は、これからの職員室のひな形でもあります。学卒院生は、若手の新鮮な見方や考え方をきちんと述べるができるか。現職院生は、それを尊重しながら発言を促し、グループ全体の議論を活性化させることができるか。そして、それぞれに「この授業研究会から何を学べたか」を言語化し、次の実践に生かすか。その訓練をする授業です。

(担当：松本敏・人見久城)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻（教職大学院）

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。